

総務企画常任委員会視察報告書

黒川 貫 男

○神奈川県湯河原町

パーク P F I を活用した万葉公園の再整備について

【所 見】

東京より 100 km と地の利を生かした温泉地である湯河原温泉は、すぐ隣に有名な観光地である熱海温泉がありながら、自然に恵まれた避暑地として雑踏を嫌う有名人や文豪が静養に訪れ、温泉観光地として栄えた。

歴史と伝統を誇る湯河原温泉も時代とともに変化が表れており、ピーク時であった平成 2 年、延べ観光客数が 8,467,000 人、うち宿泊者数 1,334,000 人あったものが、平成 30 年には延べ観光客数が 3,646,000 人、うち宿泊者数が 690,000 人に減少し、延べ観光者数 43%、宿泊者数は 51% の減となった。地場の観光産業の低迷が続き、厳しい状況であった。

今回の視察項目である「万葉公園再整備事業」については、民間活力を導入する「パーク P F I 事業」の取組がなされた。また、湯河原温泉の最大の観光エリアである「湯元通り」地区を中心に平成 26 年度から街なみ環境整備事業に取り組み、江戸時代から培われた古さを生かした面的な路地空間の整備と合わせ、この一帯の核になる万葉公園の再整備が始まったとのことであった。

まず、私たちが説明を受けた湯河原町立美術館は、湯河原町に所縁のある二人の画家の作品展示や現代日本画家・平松礼二の作品展示や館内に設けたアトリエを見学した。四季の自然や「足湯」につかれるオープンカフェなども併設され、とても「おもてなし」が感じることができた。

万葉公園での「パーク P F I」事業では、事業者サウンディングを行い、7 社が参加したが、応募登録をした民間業者は結果的には 1 社であったとのことであった。この「パーク P F I」のコンセプトが「野外リビング&ガーデン」であり、だれでも散策できるガーデンとして、自然を愛でながら温泉に入れる施設、ライブラリィ、カフェ・ダイニング、観光ステーションとしての機能を備えた、昼間の居場所を提供できる公園とする、まさに木立の茂る清流である藤木川・千歳川の清閑なロケーションを上手く活用した公園整備であった。

古くから町民に親しまれていた公園であり、今回のリノベーションで特に感銘を受けたのは、民間のアイデアによる「川の道」の「仕掛け」で、所々にテーマ付けたテラスを設けていて、景色を楽しんだり本を読んだり、のんびりと過ごす

ことができる。

一方で、この万葉公園の一番奥に位置する日帰り温泉施設である「惣湯テラス」では、公園の環境を生かしたリゾートを感じさせる施設であり、最近の観光客の傾向である「若い人」「日帰り」をターゲットにした収益施設であったが、本来の大きな目的である、温泉街「湯河原」においての「宿泊客増加や町の賑わい」の観点からみると、それでよいのか多少疑問も感じた。

この「パーク P F I」を導入し、公園再整備を行った万葉公園は、近くを県道 75 号線が走り、その県道に湯河原温泉街が形成されており、町民に利用しやすい恵まれた立地条件が揃っているが、足利市でこのような整備をする場合、環境の観点からみると、溪谷やせせらぎのある足利の山間部が対象となり、費用対効果が大変難しいと感じた。

しかし、この「パーク P F I」手法は、民間手法が多いに生かされ、また、湯河原町のように整備地区内に収益施設を許可する新しい試みが行われ、指定管理だけではなく収益も含めた全体を管理することにより活性化を図っている点は、大いに参考になった。